

大学生アスリートの主体性構造に関する探索的研究

著者	新美 尚行
雑誌名	教養研究
巻	25
号	1
ページ	1-17
発行年	2018-07-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1265/00000632/

大学生アスリートの主体性構造に関する探索的研究

新 美 尚 行

I 緒言

様々なスポーツにおいて、競技成績の向上にはアスリートの身体的能力はもとより精神的能力が強く関係することは周知の事実であろう。身体活動であるスポーツについて船津（2000）は、「ただ単に刺激に対する生物学的反応や物理的運動を表すのではなく、人間による自己意識、自己統制の行為を意味すること」であり、「人間の意識的努力、計画的訓練、目的的学习を通じて身体能力の向上がはかられる」（船津、2000、pp87-88）と述べていることから、アスリート自身の意識性が身体能力の向上には必要不可欠であることも容易に想像できる。

アスリートの多くは、競技生活において怪我や記録の伸び悩みといった各種困難との対峙が頻繁に生じ、その都度、困難を克服する作業が為されていることが推察されるが、それらの困難を解決する方法については、スポーツ種目そのもののプログラムにおける工夫や、生活を変えることなどが挙げられており、いずれの事柄においても、選手自身が考え、行動することが大切だと述べられている（小野ほか、1971）。換言すれば、アスリート自身が何を変化させればよいのかを考え、主体性を発揮し競技に取り組むことが困難解決の要因になり得ると言えよう。この主体性の概念については定義が錯綜しており、とりわけスポーツ社会学においてはスポーツ的社会化研究において議論がなされてきた。スポーツ的社会化研究は「スポーツへの社会化」と「スポーツによる社会化」

との側面から進められてきたが、当初の理論では社会化される個人（Socializee）が社会化の担い手（Social Agent）から一方的に影響を受けるだけの存在とされていることへの批判から、近年では、社会化される個人を主体的・能動的に捉える主体的社会化論に基づいた研究が進められている（吉田、1992）。スポーツにおける主体的社会化論の分析視点には、①スポーツ場面でアスリートが主体的行為を如何に発揮していくのか、②スポーツ場面でアスリートの主体性の質が如何に変容（向上）していくかという点が挙げられ（吉田、1992）、主体的社会化論においては日常的（ルーティンの）な状況よりもむしろ、問題的な状況でこそ主体性が発揮されるとされている。以上の視点から、スポーツ社会学においてはアスリートの困難克服の道筋の研究（吉田、2001、2006、2012；吉田・中島、2007）や、挫折からの立ち直りの過程に関する研究（和ほか、2011）がなされており、これらは問題状況に直面したアスリートが如何にして主体性を発揮し克服していくかといった上記①に当たる視点からの研究が主である。

いずれの先行知見においても、困難の克服や挫折からの立ち直りと言った問題状況に対峙した際の主体性発揮には他者の働きが重要であることが示唆されているが、アスリートが日常的に発揮している主体性の具体的構造に着目した研究は見当たらない。スポーツ心理学においては、アスリートの心理的成長のプロセスとして「転機」に着目し、転機通過がその後の競技生活やセカンドキャリアに如何なる影響を及ぼしているのかを検討した研究が見られる（杉浦、2004；豊田・松田、2004）。これらの困難や転機と対峙した際にアスリートが発揮している主体性の具体的構造に着目することは、アスリートの育成・指導への一助となり得るだろう。尚、本研究で扱う主体性は、吉田（1992）が提示した理論的枠組みを支持し、「主観性（autonomy）」^{注1）}と「自律（独立）性（subjectivity）」^{注2）}といった広義の意味内容を有し、認識の状況といった主観性の発現様態から、自律性の発揮によって顕現される行為までを含むものとして捉えることとする。

以上に鑑み本研究の目的は以下の2点に集約される。すなわち、1)アスリートが発揮している主体性構造(意識・行動)の探索的検討、2)主体性発揮に関わる要因の検討である。本研究はその目的の性質から仮説生成の立場を採る。また、調査対象者については、高等学校から大学への進学に伴い、育成期からパフォーマンス期へ移行(Gulbin et al, 2013)がなされ、競技活動においてより自主的かつ主体的な取り組みが求められる大学生とする。

II 方法

1. 予備調査

大学生アスリートが考える「主体的な競技活動への関わり方」の具体例を収集、集約することを目的とし、2017年10月、A大学運動部活動に所属する学生を対象に予備調査を実施した。調査では、「主体的な競技への関わり方」とは具体的にどのような事柄かを自由記述式で回答を求めた。配布部数、回収部数共に165部、分析対象は欠損回答の無い131名を対象とした(有効回答率79.4%)。得られたすべての記述について、類似している回答を統合し最終的に大学生アスリートの「主体的な競技への関わり方」を66項目に分類した。

2. 本調査

予備調査で得られた「主体的な競技への関わり方」についての結果をもとに質問紙を作成し、大学生アスリートの主体性構造の把握を目的として、2018年1月から3月下旬にかけてA大学およびB大学運動部活動所属者を対象に質問紙調査を実施した。配布部数は550部、回収部数は280部であったが、欠損回答が無い228部を分析対象とした(有効回答率81.4%)。具体的な調査内容は以下の通りである。

1) 個人的属性

性別、学年、年齢。

2) 競技活動状況

所属部活動、部内における役職、競技歴、経験種目数、練習頻度、指導者の指導頻度。

3) 競技成績

所属チームにおける「高校期」「2017年度シーズン」「大学入学後から2017年度まで」の最も良い競技成績についてと、個人の競技成績（記録）の推移。

4) 競技活動に関する意識

大学進学理由と競技活動継続の意思、高校期から2017年度までの各年度のモチベーションについて、主体的な取り組み度合い、満足度。

5) 主体的な競技への関り方

大学生アスリートの主体性構造について探索的に検討する目的から、予備調査で得られた「主体的な競技への関り方」についての66項目を用いて、各項目が自分にどの程度当てはまるかを、「1 あてはまらない」「2 どちらかと言うとあてはまらない」「3 どちらとも言えない」「4 どちらかと言うとあてはまる」「5 あてはまる」の5件法にて回答を求めた。

3. 分析

すべての統計解析には EZR を使用した。EZR は R および R コマンダーの機能を拡張した統計ソフトウェアであり、自治医科大学附属さいたま医療センターホームページで無償配布されている（Kanda, 2013）。分析においては、Student の t 検定、ノンパラメトリックによる多重比較（Steel-Dwass 法）を行い、有意水準は 5 % とした。

4. 倫理的配慮

予備調査、本調査共に質問紙を配布する際、調査の趣旨・調査協力の有無を確認し、個人情報に厳重に保護をする説明をした。質問紙は回収後、数回積み替えし、順番を入れ替えることで個人を特定できる要素を完全に排除した。

Ⅲ 結果

1. 対象者の属性

対象者の属性の内訳は、表1の通りである。

表1 対象者の基本的属性

	項目	n	%
性別	男性	196	86.0
	女性	32	14.0
学年	1年生	93	40.8
	2年生	63	27.6
	3年生	55	24.1
	4年生	27	7.5
所属部活動	ホッケー	23	10.1
	バレーボール	3	1.3
	バスケットボール	15	6.6
	硬式テニス	1	0.4
	軟式野球	1	0.4
	剣道	24	10.5
	サッカー	29	12.7
	硬式野球	80	35.1
	ウェイトリフティング	23	10.1
	フットサル	1	0.4
	柔道	10	4.4
	バドミントン	9	4.0
	陸上競技	9	4.0

2. 進学理由における競技継続の意思とモチベーションの推移

表2は、大学にて競技を続ける（続けたい）という意味が、大学進学の原因にどの程度あったかを示している。「あった」は153名（67.1%）と最も多く、次いで「まああった」が49名（21.5%）、「あまりなかった」12名（5.3%）、「なかった」14名（6.1%）であった。

表3は高校期から現在までの競技に対するモチベーションの推移を示している。いずれの年代においても「ある」もしくは「まあある」と回答した者が75%以上の高い割合で推移している。

表2 進学理由における競技継続の意思

項目	n	%
あった	153	67.1
まああった	49	21.5
あまりなかった	12	5.3
なかった	14	6.1

表3 モチベーションの推移 (%)

時期	ある (あった)	まあある (あった)	あまりない (なかった)	ない (なかった)
高校期	71.93	19.30	4.82	3.95
大学1年	55.70	33.77	7.46	3.07
大学2年	40.94	44.88	10.24	3.94
大学3年	47.06	30.88	13.24	8.82
大学4年	45.45	31.82	9.09	13.64

3. 高校期と大学期の最高競技成績

高校期の最も良い成績と、大学期の最も良い成績をたずねた結果を表4に示した。高校期では「県大会出場」が55名(24.1%)と最も多く、「全国大会出場」49名(21.5%)、「以上の大会への出場なし」29名(12.7%)と続いた。大学期においては「以上の大会への出場なし」が87名(38.2%)と最も多く、「全国大会出場」52名(22.8%)、「(各地区)ブロック大会出場」34名(14.9%)と続いた。

表4 高校期と大学期の最高競技成績 (n・%)

時期	国際大会 入賞	国際大会 出場	全国大会 入賞	全国大会 出場
高校期	4 (1.8)	3 (1.3)	26 (11.4)	49 (21.5)
大学期	1 (0.4)	4 (1.8)	16 (7.0)	52 (22.8)

時期	(各地区) ブロック大会 入賞	(各地区) ブロック大会 出場	県大会 入賞	県大会 出場	以上の大会 への 出場なし
高校期	18 (7.9)	20 (8.8)	24 (10.5)	55 (24.1)	29 (12.7)
大学期	9 (4.0)	34 (14.9)	4 (1.8)	21 (9.2)	87 (38.2)

4. 大学生アスリートの主体性の構成因子解釈

大学生アスリートの主体性構造を明らかにする目的から、設定した66項目について因子分析（最尤法、スクリープロットにより因子数を決定、プロマックス回転）を行った。その結果、本研究対象における大学生アスリートの主体性は3因子から構成されることとなった（表5）。

因子解釈と命名については、因子負荷量0.40未満の項目や、2つ以上で0.40以上の因子負荷量を有する項目は削除し、解析対象を34項目とした。なお、信頼性の検討のため、クローンバックの α 係数を算出したところ、各下位尺度とも0.90以上の内部一貫性がみられた。

抽出された第1因子に高い負荷量を示した項目は、「私生活から競技を意識するようにしている」「スポーツについて自分で調べるようにしている」「練習メニューを改善するようにしている」などの14項目である。これらの項目は、学生アスリートの競技力向上を意図した際の意識や行動であると捉え、「競技力向上を意図した意識・行動」因子と解釈した。

第2因子に高い負荷量を示した項目は、「年齢に関係なく他者のアドバイスを素直に聞き入れるようにしている」「競技にプラスになりそうなことを取り入れるようにしている」「健康・体調管理に気を付けるようにしている」など

11項目である。これらの項目は、学生アスリートの日常生活における自己管理や、他者から得られた情報の自己への反映であると捉え、「自己管理と自己反映」因子と解釈した。

第3因子に高い負荷量を示した項目は、「辛い練習こそ乗り越えるようにしている」「集中して練習に取り組むようにしている」「意図をもって練習に取り組むようにしている」の9項目である。これらの項目は、学生アスリートの競技活動に対する心持や意識であると捉え、「対競技活動意識」因子と解釈した。

表5 大学生アスリートの主体性因子構造

(最尤法：Promax 回転)

因子解釈と構成項目	因子負荷量		
	F 1	F 2	F 3
第1因子：競技力向上を意図した意識・行動 ($\alpha = 0.92$)			
q16-11 私生活から競技を意識するようにしている	0.76	0.05	-0.06
q16-5 スポーツについて自分で調べるようにしている	0.73	0.07	-0.08
q16-14 練習メニューを改善するようにしている	0.72	-0.06	0.05
q16-4 自主練習をするようにしている	0.69	-0.10	0.09
q16-55 競技について本を読んで勉強するようにしている	0.67	-0.08	-0.05
q16-3 指導者にアドバイスを求めるようにしている	0.65	-0.01	0.09
q16-45 練習についてノート(練習日誌)をつけるようにしている	0.64	-0.13	-0.11
q16-25 新たな練習法に挑戦するようにしている	0.63	0.31	-0.15
q16-60 指導者と意見交換をするようにしている	0.61	-0.18	0.30
q16-48 他大学の選手の情報を調べるようにしている	0.60	0.01	0.13
q16-65 自分が所属する組織の指導者以外にも指導をお願いするようにしている	0.60	-0.10	0.18
q16-6 他人よりも優れていると信じるようにしている	0.59	0.09	-0.27
q16-49 競技後のケアに気を付けるようにしている	0.46	0.09	0.24
q16-40 積極的に指導してもらうよう指導者へお願いするようにしている	0.46	0.08	0.22
第2因子：自己管理と自己反映 ($\alpha = 0.92$)			
q16-33 年齢に関係なく他者のアドバイスを素直に聞き入れるようにしている	-0.02	0.80	-0.01
q16-38 競技にプラスになりそうなことを取り入れるようにしている	-0.11	0.77	0.18
q16-32 感謝の気持ちを持って競技に取り組むようにしている	-0.15	0.75	0.17
q16-36 基本的なフォームを意識して練習するようにしている	0.09	0.72	-0.05
q16-37 多くの意見を聞いて取り入れるようにしている	0.01	0.70	0.02
q16-39 競技の妨げにならぬよう学業成績を下げないようにしている	0.00	0.68	-0.14
q16-34 健康・体調管理に気を付けるようにしている	-0.02	0.65	0.14
q16-8 身体の状態を把握するようにしている	0.05	0.62	0.01
q16-47 道具に気を遣うようにしている	0.15	0.62	-0.03

q16-23	長所を伸ばすようにしてる	0.18	0.59	-0.01
q16-18	睡眠に気を付けるようにしている	0.15	0.49	-0.06

第3因子：対競技活動意識 ($\alpha = 0.93$)

q16-43	辛い練習こそ乗り越えるようにしている	0.01	0.08	0.74
q16-30	集中して練習に取り組むようにしている	-0.10	0.21	0.73
q16-41	意図をもって練習に取り組むようにしている	0.15	0.09	0.64
q16-54	自分に足りない部分を意識して練習するようにしている	0.21	0.07	0.62
q16-26	常に全力で取り組むようにしている	0.02	0.24	0.51
q16-52	モチベーションを高く保つようにしている	0.21	0.13	0.50
q16-63	精神面を鍛えるようにしている	0.18	0.20	0.49
q16-31	他人の良い部分をまねるようにしている	-0.01	0.31	0.43
q16-57	自分に足りない部分を明確にするようにしている	0.21	0.17	0.41

因子間の相関

F1	競技力向上を意図した意識・行動	1.00	0.68	0.73
F2	自己管理と自己反映		1.00	0.66
F3	対競技活動意識			1.00

5. 主体性と性別、役職、競技種目経験数との関連

表5において抽出された各因子に対する回答を得点化し、「性別」「部内における役職の有無」「競技種目経験数」の各項目について2群間の平均値を比較した(表6)。尚、競技種目経験数については、算出された平均値(2.04)から標準偏差(1.25)を足した3種目以上の62名と、2種目以下の166名とで比較を行った。

結果、いずれの項目においても各群間の有意差は認められなかった。

表6 「性別」「役職の有無」「種目経験数の違い」による因子平均点の比較

項目		平均値 (SD)		
		F 1 競技力向上を意図した 意識・行動	F 2 自己管理と 自己反映	F 3 対競技活動意識
性別	男性 (n=196)	48.40 (12.30)	47.92 (9.00)	35.35 (7.62)
	女性 (n=32)	46.87 (8.61)	50.03 (6.33)	37.84 (6.19)
	t 値	0.67	-1.26	-1.75
		n.s.	n.s.	n.s.
役職	役職あり (n=43)	48.93 (10.61)	49.90 (7.59)	36.76 (6.46)
	役職なし (n=185)	48.01 (12.14)	47.83 (8.91)	35.45 (7.68)
	t 値	-0.45	-1.41	-1.03
		n.s.	n.s.	n.s.
種目経験数	3 種目以上 (n=62)	48.69 (11.87)	48.80 (8.52)	36.51 (9.97)
	2 種目以下 (n=166)	48.00 (11.87)	48.00 (8.78)	35.39 (7.65)
	t 値	0.39	0.61	1.05
		n.s.	n.s.	n.s.

n.s.not significant

6. 主体性と学年、競技レベル、個人成績推移との関連

表5において抽出された各因子に対する回答を得点化し、「学年」「競技レベル」「個人成績推移」の各項目についてそれぞれの群間の平均値を比較した(表7・8・9)。尚、競技レベルについては国際大会入賞・国際大会出場・全国大会入賞・全国大会出場経験を有する73名を「全国大会以上レベル」、(各地区)ブロック大会入賞及・(各地区)ブロック大会出場経験を有する43名を「ブロック大会レベル」、県大会入賞・県大会出場経験を有する25名を「県大会レベル」、以上の大会への出場経験が無い87名を「出場経験なし」とし、比較を行った。

表7 学年による因子平均点の比較

	平均値 (SD)				P 値	
	1 年生 (n = 93)	2 年生 (n = 63)	3 年生 (n = 55)	4 年生 (n = 17)		
F 1 競技力向上を意図した意識・行動	49.60 (10.84)	48.39 (11.69)	46.03 (13.54)	46.64 (11.79)	.367	n.s.
F 2 自己管理と自己反映	49.43 (8.52)	47.63 (7.97)	47.34 (9.86)	46.64 (8.10)	.248	n.s.
F 3 対競技活動意識	37.11 (7.13)	34.71 (6.74)	34.89 (8.72)	34.23 (6.82)	.061	n.s.

n.s.:not significant

表8 競技レベルによる因子平均点の比較

	平均値 (SD)				P 値	
	全国大会以上レベル (n = 73)	ブロック大会レベル (n = 43)	県大会レベル (n = 25)	出場経験なし (n = 87)		
F 1 競技力向上を意図した意識・行動	45.65 (12.66)	47.27 (10.90)	50.72 (11.10)	50.03 (11.53)	.050	n.s.
F 2 自己管理と自己反映	46.80 (8.77)	48.06 (8.26)	49.80 (6.93)	49.03 (9.24)	.222	n.s.
F 3 対競技活動意識	34.80 (7.77)	35.65 (7.66)	37.24 (5.84)	36.03 (7.57)	.567	n.s.

n.s.:not significant

表9 個人成績推移による因子平均点の比較

	平均値 (SD)				P 値	
	良くなっている (n = 62)	あまり 変わらない (n = 88)	悪くなっている (n = 22)	まだ試合に 出場していない (n = 56)		
F 1 競技力向上を意図した意識・行動	50.75 (11.85)	47.37 (11.08)	46.72 (9.52)	47.19 (13.60)	.137	n.s.
F 2 自己管理と自己反映	51.74 (6.33)	46.77 (7.99)	49.09 (7.38)	46.26 (7.38)	.001	**
F 3 対競技活動意識	37.67 (6.56)	35.06 (7.25)	36.59 (4.92)	34.16 (9.08)	.072	n.s.

n.s.:not significant、** : $P < 0.01$

結果、個人成績推移における「自己管理と自己反映」因子にて有意差が認められ、「あまり変わらない」(46.77)「まだ試合に出場していない」(46.26)と回答した者に比して、「良くなっている」(51.74)と回答した者が高い数値を示した(いずれも $p < 0.01$)。学年・競技レベルによる比較では有意差は認められなかった。

IV 考察

本調査対象者における高校期と大学入学後の競技レベルの推移を比較すると、全国大会以上レベル（国際大会入賞・国際大会出場・全国大会入賞・全国大会出場）の者の割合に大きな違いは見られなかった（高校期：36.0%、大学期：32.0%）が、大学期においては大会への出場経験が無い者の割合が高校期に比して増加（高校期：12.7%、大学期：38.2%）し、一方で、高校期に比して県大会レベル（県大会入賞・県大会出場）の者の割合が減少（高校期：34.6%、大学期：11.0%）していた。大学の競技会、特に各地区の学生連合（学生連盟）が主体となり開催される対抗戦などの大会は、その多くが各地区のブロック大会からの出場がほとんどであり、各地区・県予選を必要とする全国高等学校総合体育大会（通称：インターハイ）との仕組みの違いによって数値に差が生じたと言える。本調査対象者の所属する部活動の種目においてはチームの出場登録人数や各種目の出場者数には制限が存在するが、補欠選手が運動部活動に関わり続ける要因として「他の人よりもうまくなりたい、他の人よりもいい記録を出したい」「レギュラーの座をとりたい」といった項目を含む「上達志向」が第1因子に抽出されている報告（山崎・鈴木、2015）や、本調査対象者においては、9割近くの者が進学理由に競技継続の意思があったことに加え、高いモチベーションを維持している点に鑑みると、大会への出場経験は無いものの、その多くの者が出場機会を得るために主体性を発揮して競技活動に取り組んでいると推察される。

上記特徴を有する本調査対象者における主体性の具体的な意識・行動は、アスリート自身が競技力向上を意図して行う行動や意識、日常生活における自己管理や競技にプラスになることを取り入れるといった自己への反映、競技に対する心持などが具体的な構造として示された。それらの主体性について、アスリートの属性の違いによる因子得点の差を検討したところ、性別、役職、種目経験数、学年、競技レベルでの比較において有意差は認められなかった。チー

ムの成績に左右される競技レベルの違いにて各因子間に差は見られなかった一方で、個人的な記録向上を含めた個人成績推移の違いにおいて、いずれの因子も個人成績が良くなっている者ほどその他の群（あまり変わらない・悪くなっている・まだ試合に出場していない）の者に比して高い数値を示し、特に「自己管理と自己反映」因子にて有意差が認められた。学生生活の変化や、自由に行える時間・範囲の拡大、活動の選択肢が増えることが推察される大学生活環境において、自己管理を行うことは競技成績を向上するうえで非常に重要な要素になると言え、大学生アスリートの競技力向上を目指す際の「自己コントロール」や「日常生活のコントロール」の重要性を示唆した報告（平田・佐藤、2008；竹川ほか、2017）とも一致する。

また、アスリートのトレーニングについて村木（2007）は、「競技パフォーマンスの発達には絶えざるトレーニングが不可欠」であり、「一旦、高いレベルに到達した選手たちは、そのレベルを永続的に保持したいと考えるのが常である」とするが、このような志向自体が「それ以上の向上を否定する保守的思考に陥り停滞に転じたことを意味する」ことから「より高いレベルでの真の難しさは変化（革新）を生み出すこと」であると説明する。更に、トップアスリートといった特に上級者においては、未知の非明示的課題が存在し、先駆的業績を目指す選手・コーチらに不可欠な「創発的」領域が存在することを指摘（村木、2007）し、他者から得られた情報や、競技にプラスになり得そうなことについて積極的に取り入れるといった自己反映の意識・行動といった主体性は、未知の領域を目指すアスリートほど発揮していると推察される。アスリートにおいては、記録の向上に伴い、更なる技術や技能の向上が求められるが、それと同時にアスリートが発揮する主体性もまたその都度変化し、特に、本研究結果からは、個人の主体性は競技成績（記録）の向上と共に、変化している可能性が示唆された。

以上に照らし、本研究から導き出された仮説は、1）大学生アスリートの主体性の具体的な構造は、競技力向上を意図した意識や行動、自己管理や自己反

映の意識や行動、競技に対する心持である、2) 大学生アスリートの主体性は個人の競技成績（記録）の推移と共に変容している、3) 競技成績が良くなっているアスリートほど自己管理に関する主体性の発揮がなされている、4) 競技成績が良くなっているアスリートほど他者からの情報や競技にプラスになり得ることを取り入れ、積極的な自己反映に関する主体性の発揮がなされている、の4点である。しかしながら、本調査は2大学のアスリートを対象としていることから、限られた種目のアスリートの主体性構造についてしか検討できていない点や、全国大会入賞以上の高い競技レベルを有するアスリートの主体性構造の把握には至っていない点が調査の限界と言える。したがって、今後は、調査対象者数を十分に増やすとともに、より多種目のアスリートへの調査を実施することに加え、本研究において導き出された仮説の検証が課題として挙げられる。

また、本調査においては、その調査の性質からも主体性の獲得過程は明らかにできていない。これらの主体性は教えることで身に付けられるのか、もしくは何らかのきっかけによって自ら身に付けるのかといった主体性獲得過程の様相について今後明らかにすることは、トップアスリート育成・指導に更なる有益な示唆をもたらすものと言えよう。この点については、特にトップアスリートを対象とした質的調査にて検討する必要があると考える。

謝辞

調査の実施に多大なるご協力をいただいた学生諸氏ならびに監督、コーチをはじめとした指導者の皆様、調査にご協力いただいた先生、職員の皆様に深く感謝申し上げます。

注

- 注1) シュッツの理論においてはレリバンスないしレリバンス体系が主体性を表すものと考えられ、一般的には、人間が知覚や行為をする際に働く選択作用における選択機能または選択基準であるとされる。この選択機能としてのレリバンスが主観性そのものであり、レリバンスを持つことによって日常生活世界を自分なりに構築することが可能となる(吉田、1992)。
- 注2) 世界に対して独立(自律)的に関わるのが、世界の複雑性の中を生きる上で不可欠となるが、我々は意味の仲介によって多くの可能性に対して取捨選択、保持を遂行する。ルーマンにおける主体性は、意味の仲介によってこのような作用を導き出す独立(自律)性として捉えられている(吉田、1992)。

文献

- 船津衛(2000) ジョージ・H・ミードー社会的自我論の展開ー。東信堂：東京。
- Gulbin, J., Weissensteiner, J., Oldenzil, K., and Gagné, F. (2013) Patterns of Performance Development in Elite Athletes. *Eur J Sport Sci*, Vol.13 (6), pp 605-614.
- 平田大輔・佐藤雅幸(2008) 心理面に関する実態調査からみた大学スポーツ選手の現状と課題ーDIPCA. 3, メンタルヘルス評価尺度を中心としてー。専修大学社会体育研究所報(56), pp39-47.
- Kanda, Y. (2013) Investigation of the freely available easy-to-use software 'EZR' for medical statistics. *Bone Marrow Transplant*. 48: 452-458.
- 和秀俊・遠藤伸太郎・大石和男(2011) スポーツ選手の挫折とそこからの立ち直りの過程：男性中高生競技者の質的研究の観点から。体育学研究56巻(1), pp89-103.
- 村木征人(2007) 相補性統合スポーツトレーニング論序説：スポーツ方法学における本質問題の探求に向けて。スポーツ方法学研究第21巻(1), pp1-15.
- 小野三嗣・調枝考治・吉岡隆徳(1971) スランプ。不昧堂：東京。
- 杉浦健(2004) 転機の経験を通したスポーツ選手の心理的成長プロセスについてのナラティブ研究。スポーツ心理学研究第31巻(1), pp23-34.
- 竹川智樹・山田美絵子・横沢民男(2017) 大学生アスリートの心理的競技能力について。21世紀アジア学研究第15号, pp45-51.
- 豊田則成・松田保(2004) 元トップアスリートの転機についての語り。びわこ成蹊

- スポーツ大学研究紀要. 創刊号, pp117-131.
- 山崎駿・鈴木秀人 (2015) 高校生・大学生の運動継続に関する研究：補欠選手が運動部活動へ関わり続ける要因に焦点を当てて. 東京学芸大学紀要. 芸術・スポーツ科学系第67巻, pp. 121-127.
- 吉田毅 (1992) スポーツ社会学における社会化論の一視覚—主体性をめぐって—. 体育学研究第37巻 (3), pp255-267.
- 吉田毅 (2001) 競技者の困難克服の道筋に関する社会学的考察：主体的社会化論をてがかりに. 体育学研究第46巻 (3), pp241-255.
- 吉田毅 (2006) 競技者の転身による困難克服の道筋に関する社会学的考察：元アメリカ杯挑戦艇クルーを事例として. 体育学研究第51巻 (2), pp125-138.
- 吉田毅・中島千恵子 (2007) 後天的身体障害者である元Jリーガーの車椅子バスケットボールへの社会化過程—困難克服の道筋に着目して. 東北工業大学紀要2. 巻人文社会科学編 (27), pp19-27.
- 吉田毅 (2012) 競技者の現役引退をめぐる困難克服プロセスに関する社会学的研究：車椅子バスケットボール競技者へのキャリア移行を遂げた元Jリーガーのライフヒストリー. 体育学研究第57巻 (2), pp577-594.

Exploratory Study on the Subjectivity of University Student Athletes

Naoyuki Niimi

Abstract: Until now, sports sociology has included research on how athletes face problems and difficulties but overcome them by exercising their subjectivity. However, studies have yet to clarify the concrete structure of their subjectivity as exercised on a daily basis.

To research a hypothesis, therefore, a questionnaire survey was administered to university student athletes as an exploratory study of their subjectivity structure and of factors related to exercising their subjectivity.

Results showed that university student athletes' subjectivity consisted of three factors: (1) "consciousness and behavior intended to improve competitiveness"; (2) "self-management and self-reflection"; and (3) "consciousness of competition activity." Comparison of these factor scores by athletes' attributes showed significant differences in the "self-management and self-reflection" of individual competition performance trends. The following four hypotheses were obtained from these results:

1. University student athletes' concrete structure of independence includes "consciousness and action intended to improve competitiveness," "self-management and self-reflection," and "consciousness of competition activity."

2. University student athletes' identities transform with the trend of their individual competition records.

3. Athletes demonstrating improved competitive performances demonstrate subjectivity of self-management.

4. Athletes improving their competitive performances demonstrate subjectivity of self-reflection.

